

周作クラブ会報

(第43号)
2011年6月17日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

- 没後15年 遠藤周作展 (1面)
- 同展の関連イベント報告(2・3面)
- 遠藤文学・原泉の旅報告(4・5面)
- ネラ(神文)の追悼文 (6・7面)
- 新連載 (8面)

遠藤周作の未発表書簡などを公開

神奈川近代文学館 「没後15年遠藤周作展」で

横浜にある県立神奈川近代文学館(横浜市中区山手町110)で4月23日から6月5日まで開催された「没後15年 遠藤周作展——21世紀の生命のために」で、多くの未公開書簡が展示された。いずれも遠藤本人から先輩・友人に出されたもので、埴谷雄高、堀田善衛、安岡章太郎、江藤淳宛ての書簡・ハガキである。これらが書かれたのは、比較的若い時期から壮年期にかけてで、特に41通にのぼる堀田善衛宛て書簡では、作家として出発していく覚悟や心意気も明かされている。

今回の遠藤周作展の開催にあたり、神奈川近代文学館が館内にある「堀田善衛文庫」の資料のなかの堀田宛遠藤書簡41通を精査したところ、すべて未発表で、遠藤が小説家として出発するまでの動向や、精神的遍歴が明らかにされている貴重な資料であることが判明した。

遠藤周作は慶應大学仏文科に在学中、「三田文学」に評論「カトリック作家の問題」を、「神々と神と」を「四季」に発表して評論家としてのスタートを切っている。以後、「三田文学」の書き手たちとの交流を深めていくが、原民喜や山本健吉らとの親交は知られてはいても、戦後派作家の代表格

の一人である堀田善衛との関係はほとんど語られることはなかった。

しかし「カトリック作家の問題」を書いた一年半後、何かの会で堀田と会った遠藤は「先日始めておめにかゝりましたのに、あんなに親しくお話し下さいまして、本当に嬉しうございまして。こんな事、後輩の僕が申上げるの失礼ですけど、僕、堀田さんが人間的にすっかり好きになりましたので、今後、僕の方から色々とお指導頂きたくお願い申し上げます」と人なつこさを滲ませ、以後はたびたび互いの住まいを訪ねあい、また手紙も頻繁にやりとりして、慶應の先輩・後輩として親密な間柄となった。

遠藤のフランス留学時にもそれは変わる事がなく、たとえば留学前に堀田が教えたという言葉——「え、かあ、遠藤、お前フランスいったら珈琲茶碗一個みても、その茶碗のうしろに、何かみつめないかんぞ」に対して遠藤はフランスからこう書く。「あの言葉はこちらに来て随分ためになりました。私は、みつめようと努力しています。体調を崩したためにその留学が2年半余りで打ち切れ、失意の帰国をし



堀田善衛宛て遠藤周作書簡・ハガキ
(神奈川近代文学館蔵)

た直後にも、逗子に堀田を訪ねたり、手紙で今後の小説を相談したりしている。そして『白い人』で芥川賞を受けたものの、受賞第一作の『黄色い人』が批評家たちから酷評されたときには、「ぼくはメチャクチャに叩かれ、一寸腐ってしまいましたが大元気で。一度、近い内、御目にかからせて下さい。文学界に六ヶ月位長篇をかきますので、その前に是非、いろ／＼と教え

て頂きどう存じます」と相談している。神奈川近代文学館が所蔵するこの書簡は、遠藤が町田市玉川学園に住まいを移した1963年の手紙で終わっている。その後の二人の手紙のやり取りは確認されていない。そればかりか、以後は交友さえ途絶えたと言われるだけに貴重な10数年間におよぶ交流の記録である。

ちなみに、全部で41通にのぼる書簡・ハガキのうち31通は、二人と縁の深かった「三田文学」(105号・春季号、現在発売中)に掲載されている。※問合せ先は、電話03・3451・9053 三田文学編集部まで。

他に興味深いのは、たとえば評論家・江藤淳に宛てた手紙である。『沈黙』が書きあげられてまもなく、いち早くこれを読んだ江藤から感想を聞いた遠藤が、感謝の念からしたためたと思われる。「先日お電話で話しあった時の御指摘、小生なりによくわかり、大兄の鑑賞力にますます信頼を感じました。作家としてこういう指摘ほど難有いものはないのです。心にしみませ」と、おそらくはイエスのなかの母なるイメージに関する指摘を思い浮かべせる記述の後、さらに作品を書いた動機に触れて、「踏絵を長崎でみた時受けた烈しい印象と感動」がこの小説を生み、自分にとって踏絵は「信仰だけでなく芸術」だと告白する初公開資料である。